

三島村とジャンベ

徳田 健一郎 Kenichiro TOKUDA

伝承文化には、対自然であったり、対人間であったり、先人たちの生きる知恵が、盛り込まれている。郷土を知ること、伝えていくことは、その地域を光らせるアイデンティティを守るためにも非常に重要であると考えられる。

しかし、多種多様な遊びが存在する現代において、子供たちにその素晴らしさ、奥深さを理解してもらうことは容易ではない。

そこで、異文化のDJEMBEを取り入れ、人々の興味関心を引き、地域の文化も同時に学ぶことで、伝統の大切さを教えていこうとしている。

西アフリカのDJEMBEには、手で叩くだけで音ができる。その直感的な部分と、誰もが踊りだすリズム、抜けるような甲高い音など、人々を引きつける様々な要素が含まれている。

その楽器のマスタージャンベフォラ¹、ママディ・ケイタが20年前、三島村にやって来た。

来日の前年、彼のドキュメンタリー映画



島内各小・中学校でのジャンベワークショップ（ギニア出身のアリ・トラオレ氏と月に一度、3島4集落の小中学校で指導を行なっている。）



鹿児島市内で行われる年間講座の発表会の様子（今年で9回目を数える年間講座では小学生から定年退職後の方まで受講している。）



三島小中学校の演奏風景（毎週土曜日に活動している。港に要人の出迎えや、島内の行事で必ずといっていいほど演奏を披露している。）



ジャンベ演奏による5年連続コンクール金賞（鹿児島県中学吹奏楽コンクールでは、器楽合奏の部で6年間出場し、注目を集めている。県内の音楽の教科書に登場したこともある。）



鹿児島市内小学校の体験ワークショップ（硫黄島にある、市の研修施設の訪れる小中学生の宿泊学習では、そのプログラムの中にジャンベ体験が必ず含まれている。）

「聖なる帰郷」が日本で公開され、その魅力を感じたテレビ局関係者が彼を日本に呼びたいと考えたのである。

彼とテレビ局の交渉から、彼自身小さな村の出身であったことから、離島の小さな村、三島村が選ばれた。彼は子供たちに溶け込み、1週間足らずのワークショップを経て、子供たちと全国ツアーを行う。

そんな彼が子供たちに発したメッセージは、アフリカを知ってほしいとか、ジャンベを叩き続けて欲しいとか、そんな言葉ではなかった。

「私は自分にジャンベを教えてくれた、小さな小さな自分の村を誇りに思っている。みなも大人になると離れるかもしれないが、三島村を大切に思ってもらいたい。」

当時スタッフとして関わっていた私は、いたく感銘を受け、そんなママディを、ジャンベを、今後も子供たちに伝えていきたいと考えた。

私がジャンベを始めた頃は、ジャンベ自体がまだ珍しいものであったが、子供たちがアフリカの楽器に関わる様子は多くのメディアに取り上げられ、村もジャンベを大きく支援し、スクールを設立するまでになった。

ママディは、すでに世界中に13校のジャンベスクール(TAMTAM MANDINGUE)設立していたが、2003年8月、講師の資格をいただき、14番目の公認校として名乗りを上げた。

スクールが出来るまでも多くの人々と関

わりを持ってきたDJEMBEであるが、スクールが設立されてからは、世界中のプレーヤーが集う国際講座を開催したり、鹿児島市から毎年1,000人以上の子どもたちが体験講座に訪れたり、その環を広げている。

また毎年村と協力し、ジャンベ留学生制度を行っており、今年で8年目を迎える。

彼らは、ジャンベを半年間学ぶことはもちろん、若者の少ない離島では、貴重な地域活動の人材として活躍している。

また留学生は日本全国から集まっており、彼らが卒業し、各地域に戻ることで、三島の名前や、伝統文化に対する姿勢などを伝えてくれているという二次的な効果も生まれている。

三島村ではジャンベという異文化を取り入れたことで、関わる物、人々、文化のすべてがグローバルな関わりへと変化してきている。今後は三島の子どもたちが、社会でグローバルな対応ができる、そしてふるさとを誇りに思う次世代の人材へと成長していくことを願ってやまない。

注

- 1 ジャンベフォラとは、一般的にジャンベプレーヤーのことを指す場合と、別格の人を指す場合の二種類の意味が存在する。後者は、テクニックばかりではなく、人はもとより、自然との調和ができる達人のこと。最終的にジャンベフォラかどうかは、十数人いる村の長老たちからの問いに、彼らを納得させられるだけの回答をだして初めて認められる。



ママディとみしまっ子による東京公演 (2008年には、世界14校のジャンベスクール校長が三島に集結。その東京公演では三島っ子も一緒に演奏した。)



留学生による清掃活動 (ジャンベ留学生は、楽器を学ぶだけでなく、地域の奉仕作業や村内イベントでも活躍する。)



留学生と子どもたちの演奏 (ジャンベを学ぶために島に滞在し、村をサポートしている留学生は、子どもたちにとって刺激となっている。)



ママディ氏による国際講座 (夏に2週間程度開かれる国際講座。毎年40人～60人のプレーヤーが島を訪れる。その半数以上が国外のプレーヤーである。)